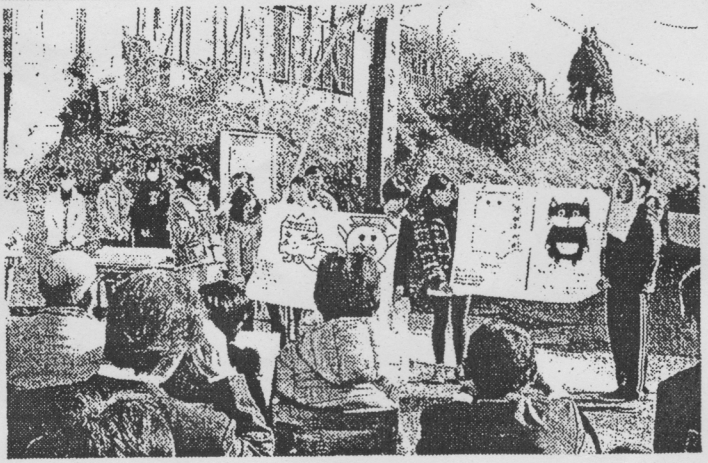

石碑の前で学習の成果を発表する市立小出小の児童たち（茅ヶ崎市下寺尾で）

「七堂伽藍跡」石碑 設置60年

茅ヶ崎で記念式典

12/17 読売 地域(27)面

茅ヶ崎市下寺尾の国史跡「下寺尾官衙遺跡群」の一部で、古代寺院跡とされる「七堂伽藍跡」の存在を記した石碑が、設置60周年を迎えたのを記念し、16日、現地で式典が行われた。

石碑が建てられたのは1957年12月。周辺は古くから瓦などが発見され、古代寺院の存在がうわさされていたが、本格的な調査は行われていなかった。そこで、地元住民や郷土史家らが、発掘調査によって遺跡の存在を明らかにし、恒久的に保存されることを願って石碑を設置。78年に初めて考古学調査が行われ、以後、確認調査が続けられてきた。

その結果、7世紀末から9世紀前半にかけての巨大寺院跡だったことが判明。大型柱穴列や区画溝などの遺構のほか、仏教に関連する銅匙や軸端、二彩陶器、大量の瓦といった遺物が出土した。さらに周辺調査で、郡庁院や正倉院など相模国高座郡の役所跡の存在が明らかになり、一帯は遺跡群として2015年に国史跡指定を受けた。

式典には服部信明市長や地域住民ら約200人が出席。記念事業実行委員会の矢野福徳会長(77)は「先人たちのこの地に対する思いがあったからこそ、今日の国史跡指定となった。後世にしっかりと伝えていきたい」と決意を述べた。その後、地元の小出小学校の児童たちが、遺跡について調べた結果を発表したり、講談師の神田山吹さんが、石碑設置の歩みを題材にした演目を披露したりして盛り上げた。